

日本語の da と朝鮮語の ita

竹 端 瞭 一

は じ め に

朝鮮語学において論議されているもののひとつに、ita (=日本語 da, de aru) を単語とみとめるか、接尾辞とするか、という問題がある。それと関連させながら、日本語の da のあつかいかたをかんがえたい。

また各言語のつかっている文字の種類や正書など文字論のファクターが文法論にあたえる影響というところに重点を置いて話をすすめる。

§ 1 da および ita

1-1. 断定の助動詞

こんにち日本で一般的な文法論には、断定または指定の助動詞という種類が立てられている。古典語の uari, tari, 現代語の da, desu などである。

- a) 朕は国家 nari.
- b) これは教科書 da.
- c) わたしはネコ desu.

a) ~ c) にあらわれた da などを、日本人は、ほとんど文句なしに、それぞれ1単語とかんがえる。ローマ字書きにすれば、b') kore wa kyôkasyo da. となるのが普通であろう。

da にあたることばをヨーロッパの言語にもとめれば、ラテン文法以来、côpula (繫辞) として用いられる be 動詞 (英語) などがある。ラテン語では sum であるが、つぎのような côpula として用いられた。

- d) Iulia filia est. (ユーリアは、むすめ da)

d) では「繫辞」といっても、べつだん $A=B$ のイコール (等号) の位置にあるわけでもなく、文のおわりにあって、「ユーリアという現象」と「むすめという現象」のふたつをまとめている。a) ~ c) にみる日本語の da など、この est (< sum) とおなじ côpula であるし、朝鮮語の ita (\rightarrow iyo = desu, imnita = de gozaimasu など) もそういえる。

- e) Ikôs ün kyokwasö ita. (これ・は・教科書・da)

注：ローマ字の字体に極端な変形をくわえたくないで、[ə^オ ~ ɔ^ウ] を ö, [ü^ウ] を ü とした。なお [æ^{オエ} ~ we^{ウエ}] は oe, [ɛ^エ] は ae, [y^{エイ} ~ wi^{ワイ}] は ui とする。

ラテン語にかぎらず、ヨーロッパの各言語で *cōpula* となることばは、それぞれ動詞であり、1 単語として独立できるものである。英語の *be*、ドイツ語の *sein*、フランス語の *être* にしても、それ自体「ものごとの名づけ」ではない。しかし文法的に、陳述という意義を持ち、単語とみとめられるのである。

したがって日本語の *da*、朝鮮語の *ita* も一人前の *cōpula*、一人前の単語であってよいはずである。が、すぐさまそういう結論は出せないのである。

1-2. 形容動詞の語尾

日本の文法教育では、橋本進吉氏の文法体系による学校文法が有力である。そこでは、1 単語であるはずの *da* も、ときには 1-1. のように 1 単語であり、またときには、ここで述べるとおり、語尾でしかなくなる。なるほど本来は接尾辞（助動詞）的であった「けれ・ども」がいまでは接続詞になっているような現象もある。しかし、断定の *da* と形容動詞語尾の *da* とのあいだには、どれほどの文法的なちがいがあるだろうか？

a) *Liz is a student.* (リズは・*da*・学生)

b) *Liz is pretty.* (リズは・*da*・きれい)

a) b) の *be* 動詞 “*is*” はどちらも *cōpula* である。これに合わせて、日本語でも、まったく同じ構造の文をふたつ作ることができる。

c) *Tieko wa bizin da.*

d) *Tieko wa kirei da.*

ところが形容動詞という品詞を立てるかんがえかたからみると、c) は “*…bizin da*” でよいが、d) は “*…kireida*” になる。この処理のしかたに対して、いろいろな批判が出され、たとえば時枝誠記氏は形容動詞を〔体言（詞）+ *da*（辞）〕に分析すべきことを論じている。

1-3. 朝鮮語における *ita*

言語政策のひとつとして、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮とよぶ）科学院言語文学研究所で出版された《朝鮮語文法》（「1. 音声論・形態論」1961 年、「2. 文章論」1964 年、東京・学友書房複製）によれば、*ita* は単語でない。

a) *Ikös-ün kyokwasö-ita.** (これ・は 教科書・*da*)

b) *Ikös-i tosi-ita.* (これ・が 都市・*da*)

c) *Kükös-ün mincucök-ita.* (それ・は 民主的・*da*)

*ふつう、母音のあとでは *i* が発音されず、ハングル（朝鮮文字）でも *ta* だけを書く。なお、*C* は [tʃ] および [dʒ] をしめす。

a) ~ c) は科学院文法では 2 単語文である。左側の主語に対して、右側が述語であり、述語になる名詞は、調音上の母音 *i* をともなって、変化語尾（朝鮮語学では *tho* とよぶ）*ta* とむすびつく、というのである。これを体言の用言形と名づけている。

大韓民国（以下、南朝鮮とよぶ）でも、金敏洙 Kim Minsu 氏、李恩昇 I Hüisüng 氏らがだいたいおなじ主張をしている。金氏の用語では「体言語幹＋叙述格接尾辞 i + ta」となる。（なお朝鮮語の用言はすべて -ta をともなうから、日本語の da の意味は i の部分にある。）

しかしながら、このゆきかたが全面的に支持されているわけではない。科学院の《朝鮮語文法》（1 の 129 p.）も、今後に研究すべきことがらとして、ita の規定のしかたをあげている。また南朝鮮でも、1963 年以来論議をよんでいる文教部の「学校文法統一方案」をめぐる、ita の問題もとりあげられた。言語関係者の世論調査で 56 % の支持を得て、南朝鮮では ita を単語とする方向がとられることになったのである。

理論的なことをぬきにすれば、ita 独立が一般の感覚に合うのではなからうか？ 時枝氏のいわゆる「分析以前に既に認定された処の概念」として単語をみれば、da や ita は、分離した単位とみなされる傾向が強いようである。

1-4. 朝鮮語の形容詞と ita

朝鮮語の ita は、完結詞（金元祐 Kim Wönyu 《正音文典》1922 年）、助詞（李弼秀 I Pirsu 《鮮文通解》1922 年）、指定詞（崔鉉培 Choe Hyönpae 《品詞分類論》1930 年）のように、単語として処理されることが多かった。

しかし、mincucök-ita（民主的 da）の ita になると、日本語の形容動詞の da とまったくおなじ疑問を起こさせる。科学院文法ではいちおう「～的のつく形容詞」とする一方、やはり今後の問題であるとも述べている。この語類は連用語を受けるので、金敏洙氏のように「副用語（＝連用語）を受けるものを用言とする。」とさかのぼり型の説明をみとめるとすれば、どうしても ita のつく体言とは別あつかいになるのである。

名詞にせよ、形容詞にせよ、ita 部分までを 1 単語とかがえるかぎり、2 種類の語尾 ita を立てなければならない。名詞の叙述格語尾としての ita と日本の形容動詞に似た「～的」形容詞語尾としての ita である。しかし、これは da とおなじく、むだな区別とみるべきである。

もし ita を切りはなしてかがえるならば、「副体語を受けることばを体言とする。」のような定義は無用となり、名詞（無変化）は連体語を受け、無変化の「-cök 形容詞」は連用語を受ける、と言いなおすことができる。

なお朝鮮語の「形容詞」には、つぎの 4 種類がある。

- | | |
|-----------------|--|
| i) ももとの形容詞 | cohta（よい）
ariümtapta（美しい） |
| ii) hata のつく形容詞 | kantan-hata（簡単な）
konnan-hata（困難だ） |
| iii) ita のつく形容詞 | tongyangcök-ita（東洋的だ）
kwahakcök-ita（科学的だ） |
| iv) 冠形詞（連体詞） | i（この）、kü（その）、cö（あの）、on（すべての）、 |

uri (わが)

iii) の形容詞は日本語の *-teki* 語類を輸入したもので、たまたま形容語・動詞につく *hata* ではなく、名詞につく *ita* とむすびついたものである。iii) の *ita* を1単語として独立させると、当然 ii) の *hata* も切りはなすことになる。ただし *konnan hata* (困難 *da*) などとはともかく、*kang hata* (強 *da*) のような1音節字音語の場合は、かえって不自然なわかし書きにおもわれる。

§ 2 文字論と単語論

2-1. 文 字 論

表題に「文字論」ということばを入れたことは、唐突な感じをあたえるかもしれない。発生からみるならば、本来、言語は音声言語であり、それを書きとめるために文字がうまれたということになる。

けれども共時的にみれば、文字は単なる記録用の、つまりレープレコーダーがわりの道具ではない。文字をつかうことは、音声言語を書きとめるいっぽうで、言語そのものをペン先から新しく生みだす表現様式でもある。こうして文字言語は音声言語とともに言語を成り立たせる様式のひとつとなり、音声言語とは別の発展を示すばかりでなく、さらに音声言語に影響をおよぼす有力な存在ともなっているのである。

このことは、言語という生活様式が概念、観念、映像といった微妙な心理的要素とふかかくかわるものである事実をかんがえれば、当然のことである。文字あるいは文字言語の表面的なすがた、内面的なはたらきは、われわれの言語生活、思想形成に大きなちからをおよぼすものである。したがって、文字論あるいは文字言語学とでもよぶべき分野は、これまで以上におもんじられなければならない。

このような観点に立って、*da* や *ita* という単語ないしは形態ひとつをあつかうにあたって、日本語、朝鮮語における文字のつかいかたといった外形が無関係なものではないとおもうのである。そこで表題に「文字論」という用語を入れたのである。

2-2. 朝鮮語の文字

古代の朝鮮語は、新羅 *Sinra* [sjilla], 百濟 *Paekce*, 高句麗 *Kokuryō* などの言語にわかれていた。わが万葉仮名にさきだって、やはり漢字による表記法がこころみられた。吏読 *ritu* (日本語では「りとう」とよびならわす。) である。日本語における宣命書の小文字表記による助辞にあたるのが「吐 *tho*」であり、この用語は現代朝鮮語学でも *tho*, *thossi* (テニハ・コトバ) のようなかたちでもちいられている。

けれども中国と陸つづきの朝鮮では中国語の圧力がつよく、封建専制主義の歴代王朝は漢文を公用語としたので、吏読の文字様式はうけつがれなかった。

グーテンベルクの印刷 (1445) にさきだって 1403 年には銅活字を発明するほどの高い文化水準に達した李氏朝鮮で、その第 4 代の世宗 *Secong* 大王が朝鮮独自の表音文字 *Hankŭl* [hangŭl] をつくったのは 1443 年である。このアルファベットは 1446

年の勅令《訓民正音》によって公布された。この勅令は言語学的にきわめて程度の高いもので、朝鮮語と中国語のちがいを、民衆の言語生活、表音文字の必要性、そして母音、子音の科学的な観察などを内容としている。

ハングルは科学性のうえではローマ字以上のもので、各音声論上の性質にしたがって各字母のかたちもたがいに関連性をもっている。

ハングルは、それ以後の支配階級によって「諺文」önmun とよばれ、本字としての漢字より下のものとみなされた。しかしハングルおよび朝鮮語は民衆のあいだで大いに普及し、ハングル・漢字まじり文およびハングルだけの文がおこなわれた。

李朝末期から日本時代初期にかけて民族語の価値を説いてまわった先覚者・周時経 Cu Sikyöng らの功績をうけつゝ近代朝鮮語学は、日本の圧迫のもとにありながらも、語彙調査、文法研究、辞典編纂、そして近代的な正書法の確立などの事業を実現させていった。

太平洋戦争時期の 1942 年 10 月には、治安維持法違反のかどで朝鮮語学会が弾圧され、大辞典編纂に従事していた 55 名の言語学者が捕えられた。2 名の犠牲者までだしたこの事件は、日本による朝鮮語抑圧政策を反映したものである。

大辞典そのほかのしごととは 1945 年の解放以後の言語政策の基礎となり、うけつがれていった。朝鮮語学会の努力は、南北分断のあとも南のハングル学会や北の科学院などによってつづけられ、つぎつぎと実際の言語政策となってあらわれた。朝鮮語は国語となり、標準語がととのえられ、文字改革が実施された。文字改革としては、漢字不使用とハングル正書法制定（よこ書き、わかち書き、つづり）とがある。

2-3. ハングル正書法

ハングル古来のつづりかたは、発音式表記にかたむいていたし、また発音も中世と現代とではかなりちがっている。これを修正した現行のつづりかたは、南北とも形態主義の立場に立つ科学的な規則にのっとっている。

1896 年ハングル書き最初の《独立新聞》Tokrip Sinmun がだされたが、旧つづりかたなので、Toknip Sinmun, tye-irho（現在は ce-irho；第 1 号）、nonsyör（現在北朝鮮で ronsör, 南で nonsör；論説）などのつづりがみだされる。

新旧つづりかたのちがいは、つぎの表でしめされるように、旧式はその都度その都度の発音表記に近く、新式は意味上の形態を固定し、現実の発音からははなれることもあるところにみられる。なお、ハングルは音素字母を音節ごとにまとめてつづる文字なので、ここでは音節ごとにハイフンを入れて、ローマ字に書きうつす。

旧式	新式	
a) to-ro	to-ro [toro]	道路
syön-no	sön-ro [sönno, söllo]	線路
no-syön	{ ro-sön (北) [nosön] no-sön (南)	路線

b) na-tha	nah-ta [nat ^h a]	生む
mök-ta	mök-ta [mök ^t ʔa]	たべる
i-ta	i-ta [ida]	だ
c) na-hüm	nah-üm [na(h)üüm]	生むこと
mö-küm	mök-üm [mögüüm]	たべること
d) nas-so	nah-so [nas ^o]	生みます
mök-so	mök-so [mök ^s ʔo]	たべます
g) tak	tark [tak]	にわとり
tar-ki	tark-i [talgi]	にわとりが
tak-man	tark-man [tagman]	にわとりだけ

ハングルの音素字母は音節文字としてもちいられ、現行つづりかたのように、各単語のなかの形態を視覚的にとらえやすくなっている。

いっぽう、漢字不使用の原則を実施するにあたって、ハングルのわかち書き ttüiyö-ssüki がかんがえられた。もちろん古くからハングルだけの文章では、当然いくらかのわかち書きはあった。しかし正書法としての基準をもったのは現在にいたってからである。たとえば1956年発表の北朝鮮科学院による《朝鮮語綴字法》にもくわしい。

2-4. 朝鮮語のわかち書き

漢字まじりの文章よりもハングルだけの文章を一般的なものとしてきた朝鮮語であるから、むかしから素朴なかたちではわかち書きがほどこされていた。日本の平安時代以降のかな書きにおいても、語形をぎわだたせるために、ことなった字体のかなをもちいたり、墨つぎのきまりをおいたりした。それとおなじ自然発生のわかち書きである。

その従来のわかち書きも、また今日のものも、おすじは文節式である。「文節」という用語は1932年の《国語学概論》(上)ごろから橋本進吉博士がつかいだしたものである。構文論の単位としては、かえって危険な概念だとおもうのであるが、発話において「文節」がみうけられるのは事実であり、古く神保格《言語学概論》(1922)の「句」、松下大三郎《標準日本文法》(1924)の「念詞(のちに詞)」などの用語で説かれている。朝鮮語学では「文節」を前面にだすことはないけれども、日本語同様、それるみいだすことはできる。やはり自立語(ssi)に付属辞(tho)のついた形式である。

ただし南北をつうじて大体文節式わかち書きであるといっても、文節そのままの切りかたではない。南と北とでいくらかのちがいもある。

たとえば、「わが国の理科教育に関して」を南では、つぎのように切る。

uri nara-üi ikwakyooyuk-e kwan-hae-sö

(わが 国・の 理科教育・に 関・し・て)

北では「理科教育に」を rikwa kyoyuk-e とわけて書く。北で完全に実施されているハングル専用文では、こう書くのが読みとりやすいようである。これに対して、漢字もまだつかわれる南では「理科 教育に」とするより「理科教育に」とつづけるほうが自然

のなりゆきであろう。

いっぽう、日本のカナモジわかち書きでは「リカ〜キョウイクニ カンシテ」とする文節型が一般的である。ローマ字では、“Rika-kyôiku ni kansite”(「田丸文法」方式；名詞大文字，成分ひとまとめ)と“rika kyôiku ni kansite”(「東大ローマ字会」方式；切りはす傾向がつよい)とが多い。ハングルやカナモジは動詞をつづけて書く傾向があるが，やはり音節文字であって，語形がみじかいためでもあろう。音素文字のローマ字やおなじく音素分解した崔鉉培氏らのよこ・ほどき書き(karo-phurô-ssûiki)のハングルでは，助詞をはなしてつづる。

わかち書きは，表意文字と表音文字，音節文字と音素文字，大文字と小文字，たて書きとよこ書きなどのちがいによって，かなりことになったものになる。

2-5. わかち書きと単語論

英語のように表音文字でつづる歴史の長い言語では，わかち書きはほぼ固定している。単語という単位もきわめて常識的にとらえられる。word(英)，terme(フ)などはわかち書きの単位をそのまま指すものとしてもちいられるのである。

Il est un anglais. (かれはイギリス人だ。)

このフランス語の文は[i-le.tê.nâgle]と連音して発音されるが，わかち書きどおり4単語の文とかがえられる。

ヨーロッパの言語でも“of course”(英)や“est-il”(=is he; フ)が1単語か2単語かという疑問，“ins”(<in das; ド)，“nella”(<in la; イタリア語)は1語形だが単語としてはふたつかという疑問などがあるにはある。

しかし一般に単語はわかりきった単位なのである。しかも屈折性のつよい言語だから，単語をそれ以上は分解しにくく，単位としてみとめやすい。ところが孤立性の中国語では，漢字1字を1単語と単純にかんがえるならばともかく，実際には「鉄路」は tie lu か tielu かといった問題がおこる。ローマ字中国語では，「連写」(lianxie，つづけ書き)のよび名でこれをあつかっている。

膠着性の日本語や朝鮮語では，中国とは逆にわかち書きの問題と関連して単語論をかんがえる必要がある。ある一連の言語音声も，

saram-tür-ür ir-ha-sikhi-öss-ü-mnita (朝)

hito-bito-o hataraka-se-masi-ta (日)

のように「単語」より深いレベルにまでらくに分析できる。文のいろいろなわけかたのなかでもっとも長いのが文節単位のものである。

ところが文節は正書法の単位としては長すぎる。kokuritu-Tôkyô-kyôiku-daigaku-huzoku-kôtô-gakkô-tyô-wa… は1文節である。これを1単語とかぞえるのは〔詞＋辞＝文節〕の図式にしばられた，実際的でない態度である。2-4. において「文節」を危険な存在とよんだが，たいせつなのは，そのあつかいかたである。

日本語，朝鮮語の文は，発音するうえでは文節がみられるし，詞と辞の組としても文

節をかんがえてもいい。しかし詞および辞という要素は、単語認定第一のてがかりではなく、構文論において、各形態の文法的性格を説明するものとみるべきである。

たとえば「飛んだ」は、わかち書きの文章では tonda, トンダと書くことになるであろう。ヨーロッパの言語や北朝鮮の文法では1単語とみられる；この単語 tonda は、詞 ton- と辞 -da の組とすることができる。たまたま時枝氏は形容動詞を否定するにあたって、それを sizuka や idai という詞、da という辞にわけられることを決定的なてがかりとした。しかし詞と辞をこのように単語認定のファクターとするのが適切でないことは“tonda”のばあいとおなじである。詞と辞を単語論から解放して、構文論にくりこめば、時枝氏の「ゼロ記号」という辞の存在もむりなくみとめられる。

§ 3 「単語」

3-1. 朝鮮語学における「形態論」

§ 2 で述べたように、文字のつかいかたと文法論のかかわりは大きい。それを如実にしめすのが朝鮮語学の現状である。

朝鮮語を文節式わかち書きでしるすと、つぎようになる。

- a) Na-nün ciküm kwahak-sosör-ür irkko issciman, nö-nün muös-ür
(私・は いま 科学・小説・を 読んで いるが きみ・は なに・を
hako issnün-ka?
して いる・か)

これはそのまま南朝鮮のわかち書きになっている。北朝鮮では「科学 小説」kwahak sosör-ür になっている。

この例文の irkko, hako は irkta (読む), hata (する) に接続の tho “-ko” のついたもので、接続形のひとつとみるのは不自然でない。それとおなじく na-nün も na (私) あるいは na-ita (私 da) の変化形とみるべきかどうか？膠着性の言語だから、自立的な形態(詞)と付属的な要素(辞)のむすびつきに関するさまざまな分析がなされるのである。

しかし、irkta, issta (ある, いる) を irk ta, iss ta のように分解してしまうことが単語論であろうか？これは形態論と名づけるべき分野であろう。いずれにしても、事実上、日本語、朝鮮語の文法論は形態素分析に重点をおいているといえる。しかも、これらの言語では、それが当然の方向ではある。

ただそこに「単語」という用語をあてはめようとするから、混乱がおきる。da や ita にしても単語であるかどうかを問う以前に、それが断定あるいは cōpula をしめす形態であることは、まぎれもない事実なのである。

ところで北朝鮮の科学院文法では、ハングルわかち書きにおいてひとつづきに書かれるつづりをなんの前ぶれもなく「単語」とよんでいる。3-1. a) の kwahak sosör-ür は2単語(南では1単語になるわけである。)となる。kwahak と sosör-ür (sosör の目的格)の名詞連結であり、kwahak は連体語とされる。北では、na-nün も文句なし

に1単語である。

したがって ita も, sosör-ita (小説だ), mincucök-ita (民主的だ) のようにつづけて書かれるのだから, やはり語尾あつかいになる。こういう単純明快な手法こそ, 実は単語論にとってのぞましいものではないか? その結果, 科学院の「朝鮮語文法」をはじめ北朝鮮の小学校 (人民学校 inmin hakkyo) 以上のすべての文法教科書は「単語論」の項目をおいていない。そのかわりに立てられる項目は「形態論」である。

ただし原則的にはこれでよいとしても, 実際には, 問題はそう単純明快ではない。現に科学院文法でも, kwahak sosör-ür の目的格 (対格 taekyök という。) 助辞 ür が “kwahak sosör” 全体にかかるのではないか, あるいは kwahak は名詞でなくて冠形詞 (連体詞) ではないか, といった疑問がもちだされている。南朝鮮では, kwahak-sosör + ür (ür を語尾とみるか, 単語とみるかは別にして) とかんがえる傾向がつよい。

3-2. 朝鮮語の形態分析

北朝鮮のやりかたをそっくりみとめるのではないが, わかち書きの単位を単語とよぶ原則は支持する。問題はどのようにわかち書きをするかである。

すでに2-5. で述べたように, 「詞」と「辞」の区別は, 単語より深いレベルでの分析である。時枝文法のかんがえかたからは, まったく当然の結果として, yama da も sizuka da も, それぞれ「詞」yama, sizuka と「辞」da にわけられる。da と yama や sizuka との関係の説明するには, 詞・辞の区別はきわめて有益である。いっぽう, tabe-sase-masi-ta のように語形のうえで1単語としたいものについても, 詞と辞への分析はおこなわれる。時枝文法では tabe-sase-* (< taberu + 接尾辞 saseru) を詞, -masi-ta (< masu + ta) を辞とする。

*saseru を橋本文法では付属語 (辞) とし, 助動詞とよぶ。時枝文法では tabesaseru を使役動詞とする。朝鮮語学でも使役や受身をあらわす形態は tho (辞) とせず, 接尾辞としている。

このような形態分析が必要な研究分野であることにはかわりはない。しかし「辞」や朝鮮の “tho” は, 北朝鮮式の文法では「単語」とはなりえない。そこで形態論という項目の問題となるのであって, 単語レベルの分析ではないのである。

単語論をこえたところで, 科学院文法の形態論はおこなわれている。その形態論にあたるのが日本語学における「語論」「品詞論」なのであるが, これは早くあらためるべきものである。

3-3. 朝鮮語形態論における ita

「朝鮮語文法」1 (音声論および形態論), 同書2 (文章論; ここでいう構文論にあたる。) では ita をどうあつかっているか? 「朝鮮語文法」1 の 180 p. 「名詞の用言的形態」§ 60 は『体言に用言的性格をあたえる接尾辞 -i-』と説明している。-ta は, ota (来る),

öpsta (ない), chata (さむい) などの -ta 同様、用言終結形の tho (辞) とされる。

日本語は原則として開音節言語であるが、閉音節の多い朝鮮語では、つぎのような現象がおこる。

〔開音節+辞〕	〔閉音節+辞〕
a) kama-ka (釜 ga)	kas-i (笠 ga)
toro-nün (道路 wa)	kir-ün (みち wa)
pato-ro (海 e)	san-üro (山 e)
b) kho-ta (鼻 da)	nun-ita (目 da)
kui-yo (耳 desu)	ip-iyö (口 desu)

a) の格助詞は、まえにくる名詞語尾が母音か子音かによって、ちがったものをつかわなければならない。これでみても、朝鮮語の tho は、日本語の助詞よりも、名詞との密着度が高いことがわかる。b) の ita, iyo (南では io と書く。), imnita (= desu; 'iyo' よりていねい) などの 'i-' は、発音上、のこしてもいいが、ふつうは、この左側のようになる。したがって終結形の tho "-ta" だけがのこり、"i-" はただの「つなぎの母音」のような印象さえあたえるほどである。

とにかく tho (ita もふくめて) と名詞との密接なつきかたを反映しているのが《朝鮮語文法》形態論の方法である。南朝鮮の金敏洙氏、李崇寧氏の文法でも〔体言 + 叙述格接尾辞 'i-' + 終結形の tho '-ta'〕のようなあつかいをしている。むろん、このばあい、-i も -ta も単語ではないことになる。

この立場では、つぎのような単語分析がとられる。(韓国・ハングル学会《ハングル》135号《国語文法教育の当面の問題》金桂坤 Kim Kyekon 氏による。)

c) I-kös-ün coh-ün sae chaek-i-ta.* (これは よい 新しい 本 だ。)

*形態素をしめすためにハイフンをほどこした。

c) は4単語の文とされる。金敏洙氏によれば、おなじ tho (辞) なのに、体言につく ün, ka, i などは単語(格助詞そのほか)とし、用言につく ün (連体形の tho), ta (終結形の tho) などは接尾辞とする不公平さを批判している。(同氏《国語文法論研究》1960年) しかしながら、これは2-5. でとりあげた、形態論と単語論の混同をうつしたもののといいたい。

体言と辞、用言と辞、それぞれの密着度や性質のちがいについて、いまのところ、科学的な資料はもちあわせていないが、やはり等質同量のものではないとおもう。言語活動の心理的な追求をこころみる時枝氏は「単語は、事実として、決して諸説のいうが如く、究竟的分析の結果認定されたものではなく、単語は寧ろ分析以前に既に認定された処の概念として考へられてゐる…」(《国語学原論》1941年, 215p.) と主張した。同氏の文法仮説からみちびきだされた発言であるが、筆者は、単語も分析すべき対象とかがえる。ただ、時枝氏とおなじように、筆者も、言語の主体である民衆のあいだにある「これが単語だ。」といった素朴な認識は重くみたい。

金敏洙氏の調査でも、同氏が単語とはみなさない ita を単語あつかいにした文法書の

ほうが多いようである。また韓国文教部による与論調査(1965年)でも ita を、現行のわかち書きとは別途に、単語としてあつかうことを支持したものが多かった。これもやはり「分析以前」の認識である。1966年7月の《ハングル》137号によれば、ハングル学会は、国会議長と文部部長官への陳情書で、当局の文法教育行政を批判するいっぽう、単語として ita の品詞研究を慎重にはこぶように要望している。

このようなかんがえを反映したものとしては、崔鉉培氏のわかち書き(そして単語認定)がある。

d) Ikös ün cohün sae chaek ita. (これはよい新しい本だ。)

日本語のローマ字もこの立場をとっているが、それは崔氏がよこほどき書きの主唱者であることと無関係ではなからう。

e) Kore wa yoi atarasii hon da.

§4 単語論と形態論

4-1. 科学院文法への評価

§2で、単語論あるいは文法体系の解釈が文字形式との深いかかわりあいをもつことを述べた。ひとつの例として、§3で紹介した北朝鮮科学院の文法がある。

科学院文法の「単語」に対するあつかいかたは、原則として支持すべきものである。ただし今日おこなわれているわかち書き規則、ひいては単語認定の方法そのまます支持するものではない。

なるほど英語の“Here are apples”を3単語とみなすように“Yöki-e sakwa-ka isso.”とつづられる文を3単語とみなすおすじは正しい。しかし科学院や金敏洙氏らの文法は、ハングルつづりかたの現状にあまりにも密着したものである。現実的、実践的であるようにみえながら、実はきわめて非能率的な分析方法である。

よこ・はぐし書きの新字母(まださきのことであろうが)そのほかの文字改革によって、わかち書きの基準がわかる可能性もかんがえに入れるべきである。また、体言の用言形をみとめることによって、体言に関する記述がいたずらに複雑になりもしている。

日本語において特にそうなのであるが、朝鮮語でも、語形の面でかんがええると、助辞をとりはずしたばあい、体言が安定した語形をみせるのに対して、用言(の語幹)の多くは不安定である。日本語の「行った」「行かない」の it (< itta), ika (< ikanai), 朝鮮語の“mökössta”(たべた)の mök, “khö”(大きく)の kh などは、単語とよぶのにふさわしくないということもみすごされている。

ita を単語とみなさないのも、現行のわかち書きにおいて、ita がつづけて書かれることと無関係ではあるまい。日本語学のいわゆる「文節」の目でみると、ita は、ほかの用言(詞)とちがって、付属語(辞)になってしまう。辞であるからには、詞としてのほかの用言と同列にはみなしにくいことになるのであろう。日本語の da もまさしくそのとおりである。

しかし、だからといって、単語ではないと決めるのは正しくない。現在のわかち書き

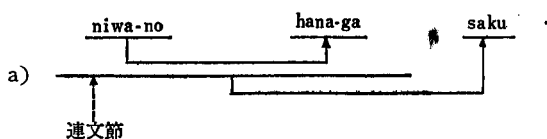
や橋本文法における文節（詞＋辞の形式）をこえたレベルで、ita や da もかんがえる必要がある。構文論のうえで辞と処理されたとしても、単語としては詞と同列においてかまわないのである。

4-2. 「文節」の否定

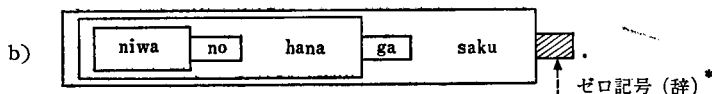
3-2. において「詞」と「辞」というとらえかたを単語論から構文論へうつすことを主張した。その詞と辞の組としては、「文節」の単位も意味がある。

しかし橋本文法のように文節を文のもっとも重要な要素としてかんがえることの無理は、すでに松下文法における「原辞」（いまの形態素とほとんどおなじ）の結合法則からみても、時枝文法における「入れ子型」の文の分析方法からみても、はっきりしている。

たとえば「庭の花が咲く。」を、文節に分析して、

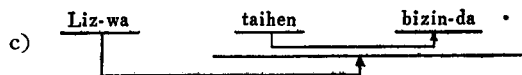


と説くよりも、入れ型によって、

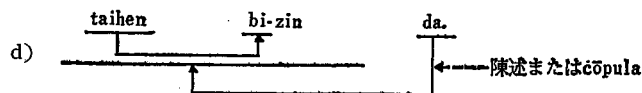


とするほうが、ひとつひとつの形態のはたらきを精密にとらえている。

* 時枝文法の「ゼロ記号」は重要な構文論の要素である。しかし「詞」「辞」を単語論からはずすとすれば、これを「辞」という用語でよぶのは適当でなくなる。単語をこえて、形態のレベルで文をみるとすれば、「リズはたいへん美人だ。」を、



のように、taihen という連用語の文節が bizin-da という、体言をふくむ文節全体にかかると説明するのはおかしい。原辞とか形態素とかの単位を立てて、



とかんがえなければならない。

これでわかるように「形容詞性」の形態をふくむならば、名詞でも、いわゆる連用語をうけるのである。

文節は日本語と朝鮮語にめだつ〔詞＋辞〕の組としては、つかまえやすい外形的な単

位であり、発音のうえでもひとつの単位である。しかし以上にみたとおり、構文論の単位ではないし、したがって単語論のためにも無用のものである。

da や ita の処理にあたっても、もはやこの文節にとらわれることのないようにし、わかち書きも、理論的には、改めるべきなのである。

4-3. da および ita の独立

4-2. d) の例文でみるように、連用語は名詞にさえかかるのである。bizin が baka や hisan 以上の名詞性をもっている証拠に “biziu na Liz” はおちつかない表現である。まして “baka na yatu,” “hisana sensô” のようにつかわれる baka や hisan は、名詞と形容詞(宮田幸一《日本語の輪郭》などのいわゆる《無変化形容詞》)のあいだにあることばである。これらのことばとともに、いわゆる「形容動詞」も〔語幹(sizuka' kirei など) + 語尾 da〕ではなく、時枝氏の指摘するように、〔形容詞性の体言 + 辞 da〕のようにみるべきなのである。

このようにかんがえられる da および ita は、時枝氏と三上章氏(《象は鼻が長い》など)の方法によれば、次のなかではつぎのような位置をしめすことになる。

- a)

Tieko	wa	taihen	na	bizin	da
-------	----	--------	----	-------	----
- b)

Tieko	wa	bizin	da
taihen	(ni)*		

 * (ni) は、ふつうゼロになる。
- c)

Tieko	wa	kirei	da
taihen	<div style="background-color: #cccccc; width: 40px; height: 15px;"></div>		
- d)

Tieko	wa	utukusii	<div style="background-color: #cccccc; width: 40px; height: 15px;"></div>
taihen	<div style="background-color: #cccccc; width: 40px; height: 15px;"></div>		
- e)

Sunhi	nün	miin *	ita
maeu	<div style="background-color: #cccccc; width: 40px; height: 15px;"></div>		

 * Sunhi 順姫(女子の名), nün (は), maeu (たいへん), miin (美人)
- f)

Sunhi	nün	arümtap *	-ta
maeu	<div style="background-color: #cccccc; width: 40px; height: 15px;"></div>		

 arümtapta (美しい)

da はすべて a) b) c) のように発話のしめくりをうけもつものとしてあつかって

いい。同様に ita も e) の位置におかれる cōpula である。

ただ問題としてのこののは、da と ita をまったくおなじ位置におくことの危険である。というのは、金敏珠氏らのいうとおり、da にあたるのは“i-”の部分なのであって、-ta はすべての用言に共通の形態だからである。このあたりから、実は「入れ子型」の修正が必要になってくるのかもしれない。

この文章でいいたいのは、すべて da および ita を単語として独立させたいということである。そうすることによって、日本語学では「形容動詞」を廃止することができるし、朝鮮語学では「体言の用言形」を排除して、体言の文法的記述を簡潔にすることができる。Noam Chomsky がいうように『その言語の Corpus (全資料) を引き出すのにどちらが良い文法であるか…』(同氏《文法の構造》勇康雄訳, 39 p.) が文法研究の要請であり、それは「簡潔」(同書 41 p.) をめやすとするのである。

その点、科学院文法などの表記法に密着したゆきかたは、単語について単純明快な定義をくだしているかにみえながら、実はかえって複雑な記号の群をみちびき出すものになっているのである。

4-4. 形態論と文法教育

文法教育の現場にあって、ひごろおもうことは、現在の「学校文法」が形態分析に重点において、生徒たちはやたらに細分されたことばのかけらをつめこまれているつまらなさである。§ 3 などであつたように、今日の日本の文法は単語論と形態論とを混同しているの、現実的な本来の単語という形式は、かげにかくれている。kaku, kaita, kakisasyô のような形式を単語とよべる文法による、もっと実践的な言語教育がかんがえられていい時期ではないだろうか？

もちろん形態論を否定するのではない。けれどもそれは学校文法においてではなく、科学文法において、いまよりいっそう深く研究する必要がある。松下大三郎における「原辞」、アメリカ言語学における‘morpheme’ (形態素) は、結局は、一般文法をめざす理論体系であり、その発展は期待されるものである。

しかし、特殊言語学としての日本語学や朝鮮語学には、現実的な単語論のレベルで、まだまだ開拓しなければならない諸問題がのこされているはずである。

そして、たとえば Chomsky の generative transformational grammar (生成変形文法) で、単語レベルをはなれ、 $NP_2 - Aux - V - NP_2$ とか $/ \dots D / + past \rightarrow / \dots D / + / id /$ とかの図式で形態論をおしすすめてゆくような科学文法も、やがては学校文法の単語論、構文論などにも反映されることになるであろう。da, ita の位置に関する明確な、科学的なこたえも、そのような研究の成果としてえられるはずである。